

激変する社会と大学

Rapidly Changing Society and University

神奈川県立保健福祉大学 学長 中村 丁次

Teiji Nakamura, President of Kanagawa University of Human Services

科学技術の進歩には目を見張るものがあり、社会は激変しつつある。キーワードは「全ての人が平和と豊かさを享受できる社会を目指すSDGs」「人工知能 (AI)、ビッグデータ、Internet of Things (IoT) 等の先端技術によるSociety5.0」「少子化と人生100年時代」「社会・経済・科学技術が地球規模で連動するグローバル社会」である。これらの基盤にあるのが、従来、人間の特技とされてきた感性、思考、教育、判断の一部を担う機械の出現である。この社会の激変に対して、高等教育、具体的に言えば大学は、どのような人材を養成すべきなのか、大きな課題になっている。

昨年、文科省の中央教育審議会大学分科会将来構想部会が「今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ」、いわゆる「2040年社会の大学の将来構想」を発表した。2040年としたのは、現在（2018年）生まれた子供たちが、大学の学部段階を卒業する時期に当たるからである。報告書は、個々人の強みが最大限に活かされ、AI時代やグローバル時代を生きる能力を有する人材を養成するには、大学を「多様な価値観が集まるキャンパス」にすべきだと主張している。大学は、従来の大学教員の自前主義や18歳中心主義から脱却し、学部・学科を越え、さらに大学自体をも越えた人的資源の活用を考え、「多様な教員」と「多様な学生」による「多様で質の高い教育・研究プログラム」が実施できるようにすべきだと言っているのである。

「多様な教員」とは、大学、学部、研究科等の枠にとらわれない専門家や実務家、若手、女性、外国籍など様々な背景をもった人々の採用である。この場合、従来の兼務、兼任、特任等の教員はもちろんであるが、クロスアポイントメント制度の活用を進めている。「多様な学生」とは、社会人や留学生を積極的に受け入れ、インクルーシブ教育のために障害のある学生も対象となる。さらに、人生100年時代においては、従来の教育、雇用、退職後という人生モデルから、退職後に学び直すケースもあり、何歳になっても入学できるマルチステージのモデルへの変換であり、多様な年齢層の多様なニーズを持った学生の受け入れが必要になる。大学の運営形態も、一法人一大学の在り方の見直し、国公立の枠組みを越えた大学等の連携や機能分担を促進する制度の創設をすべきだとしている。

当大学は、2003年の開校当時から時代の先取りをして、社会人入学、大学院の夜間授業、さらに実践教育センターの併設等に取り組んできた。しかし、時代の変化は我々の予測以上に過激であり、今後、このような急速な変化への対応が必要となると思っている。

